

上着を売って剣を買いなさい (自立伝道の道に変わる)

ルカ福音書22:35-38
(新改訳2017訳)

22:35 それから、イエスは弟子たちに言われた。「わたしがあなたがたを、財布も袋も履き物も持たせずに遣わしたとき、何か足りない物がありましたか。」彼らは、「いいえ、何もありませんでした」と答えた。

22:36 すると言われた。「しかし今は、財布のある者は財布を持ち、同じように袋も持ちなさい。剣のない者は上着を売って剣を買いなさい。」

22:37 あなたがたに言いますが、『彼は不法な者たちとともに数えられた』と書かれていること、それがわたしに必ず実現します。わたしに関わることは実現するのです。」

22:38 彼らが、「主よ、ご覧ください。ここに剣が二本あります」と言うと、イエスは、「それで十分」と答えられた。

【祈りながら考えよう】

- (1) この剣は戦いのためのものではないことを、他の聖句から説明して下さい。
- (2) 37節の「彼は不法な者たちとともに数えられた」(イザヤ53:12)の意味を説明して下さい。
- (3) 自立伝道の道は、今日の私たちにどのように適用できますか。

【解説】

(1) 不足した物は何もなかった

《わたしがあなたがたを、財布も袋も履き物も持たせずに遣わしたとき、何か足りない物がありましたか》
《いいえ、何もありませんでした》

かつて、主は弟子たちを、《財布も袋も履き物も》、最小限必要な物さえ《持たせず》に遣わされた。ここで言われているのは、ルカ9章2節以下の伝道旅行のことであろう。その頃は、主イエスの名声は高く、多くの人々に好意を持って迎えられていたから、その弟子たちも同じように扱われた。主イエスのなさる奇跡と説教に引きつけられて来ていた。おびたしい病人が連れて来られ、たちどころにいやされた。また女、子供を入れると、二万人ぐらいの人々がお腹をすかせていると、主イエスは子供の弁当1つで、彼らを満腹させておやりになった。

そういう時代には、その主イエスの弟子であるということだけで、人々が好意を持って迎えてくれた。ぎりぎりの必需品だけで十分であった。弟子たちは「不足した物は何もなかった」と言うほかなかった。

(2) 剣を買いなさい

《しかし今は、財布のある者は財布を持ち、同じように袋も持ちなさい。剣のない者は上着を売って剣を買いなさい》

①これからは弟子たちに軽蔑と迫害が始まる

これからは以前のようにはいかない。財布も食料を入れる袋も自分で用意して行かなければならない。主イエスが、イザヤ53章12節の預言の成就として、不法な者たちの1人に数えられて殺される。

主イエスがそうなれば、弟子である彼らに対しても軽蔑と迫害が始まる。彼らは貧困、飢え、危険にさらされることになる。彼らはさしあたり必要な物を備えなければならなくなる。

これからは《財布》も《袋》(食糧を入れるための物)も持って行くべきであり、《剣》がなければ《着物を売って剣を買》うべきであった。

ところで、救い主はどのような意味で弟子たちに《剣を買いなさい》と言われたのか。一読したところでは、今後の伝道は時には武力の迫害に遭うことがあるから、その用心のために武器を持って行けと言われているようである。

②武器として剣を買いなさいと言われたのではない

イエスが捕らえられる際に、ペテロがその剣で祭司長のしもべに切りかかって、その右の耳を切り落とした時(ルカ22:50)、イエスはしもべの耳をいやし、ペテロを押しとどめた。「そのとき、イエスは彼に言われた。『剣をもとに収めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。それとも、わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今すぐわたしの配下に置いていただくことが、できないと思うのですか。』」(マタイ26:52-53)と言われた。明らかに剣の力は否定されている。ではなぜイエスは帯刀を奨励するようなことを言われたのか。人々を攻撃するための武器として剣を使えと言われたのではないことは明らかである。下記の主の教えにも反するからである。

- ① 《わたしの国はこの世のものではありません。もしこの世のものであったなら、わたしのしもべたちが…戦ったことでしょう》(ヨハネ18:36)。
- ② 《剣を取る者はみな剣で滅びます》(マタイ26:52)。
- ③ 《自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい》(同5:44)。
- ④ 《あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい》(同5:39、Ⅱコリント10:4も参照)。

③どのような意味で「剣を買いなさい」と言われたのか

それでは、イエスはどのような意味で「剣」と言われたのか。

- ①ある人々は、「御霊の与える剣(神のことば)」(エペソ6:17)のことだと考えている。そうかもしれないが、その場合は、財布、袋、着物も霊的な意味に解釈しなければならなくなる。
- ②聖書学者ラングは、「この剣は敵から身を守るための物であって、攻撃用の物ではない」と言っている。しかし、マタイ5章39節は、たとえ自分の身を守るためであったとしても、剣を使うことを許していない。
- ③ある人々は、「この剣は野獣から身を守るためにだけに用いた物である」と考えている。そうかもしれない。

(3) イザヤ53章12節の預言の成就

《あなたがたに言いますが、『彼は不法な者たちとともに数えられた』と書かれていること、それがわたしに必ず実現します。わたしに関わることは実現するのです。》

主イエスは旧約聖書のイザヤの預言を引いて、ご自分の十字架上の死のことを説明しておられる。イザヤ53章12節の預言に従って、彼らのもとを去って行こうとしておられた。

主は《わたしに関わることは実現します》と言われた。主の地上のご生涯は、《不法な者たちとともに数えられ》ることによって終わりを迎えようとしていた。

イザヤ53章に出て来る苦難のしもべは、神に打たれる。それは《私たちの背きの罪のために殺され、私たちの不義のために血を流された》

ということである。「彼は不法な者たちとともに数えられた」とはそのことを意味している。

主イエスは聖い神の御子として、全く罪を持っておられないお方であった。その点において、生まれながら罪人である私たちとは全く別のお方である。

ところが、そのお方が、私たちの罪を背負って、その罪のために神の裁きを受けて下さった。「彼は不法な者たちとともに数えられた」とは、私たちと同じ所に立って下さったということである。

造り主から被造物へ、罪のないお方から罪人へと、ご自分の立場を変えて下さった。全く罪を持っておられないお方が、私たち罪人の立場に立って、私たちの代わりに十字架上で死んで下さった。これほど驚くべきことはない。

(4) 自立伝道の道に変わる

主イエスが十字架に掛かって殺されるということになると、主イエスの弟子たちに対する世間の目は変わってしまう。翌日になると、あの主イエスの所に群がり集まって来た群衆が、主イエスを十字架に付けよと狂い叫ぶようになる。そのことを主イエスのご存知であった。人の心は変わりやすい。そうなった時、悪者扱いにされた主イエスの弟子たちに対する風当たりも当然強くなって来る。だから、以前のように人々の好意に頼って伝道するやり方は出来なくなる。これからは神のみを信頼する信仰を持って、自立していかなければならない。

パウロたちの伝道旅行を見ると、そのことがよく分かる。彼らは、彼らの伝道によって救われた人々からの自発的なささげ物によって、主の働きをしていくことはあったが、ほとんどは天幕造りをしながら、自立して伝道した。

それは、今日でも同じである。神のみを信頼する信仰を持って、自立していくことが大切である。今日でも人の好意に頼って主の働きをしようとする人が、少なからず存在する。自分の働きをアピールし、さらに献金をアピールする人がいるが、それは、神のみを信頼する信仰を持って自立するということとは違っている。

信仰生活において、主の働きをしている人を、愛のささげ物によって支援することは大切なこと。しかし、そういう愛のささげ物による支援を当てにするということは、反対方向である。人の好意を退ける必要はないが、人の好意に頼ってはいけない。それは、結局のところ神に頼るのではなく、人に頼ることになるからである。人に頼ると、どうしても人の顔を伺うようになり、信仰の自由がなくなる。神のみを頼りとする信仰によらなければ本当の自立はなく、本当の自由もない。

(5) 弟子たちの誤解

《彼らが、「主よ、ご覧ください。ここに剣が二本あります」と言うと、イエスは、「それで十分」と答えられた。》
弟子たちは主が言われたことを完全に誤解した。彼らは《剣》を《2本》差し出し、「どんな問題が待ち受けていようと、これで十分だ」と言わんばかりだった。主イエスは《それで十分》と言ってこの話を終わりにされた。

彼らは、主を殺そうとする主の敵の企てを剣を用いることによって、くじくことができると考えていた。そのような考えは主の御心とは全く掛け離れたものであった。

愛する弟子たちの理解を得られない悲哀を感じながらも、イエスは救い主としての計画を実現していかなければならなかった。

